西村茂樹著「日本道徳論」岩波文庫　岩波書店 1935 年 1 月 25 日刊を読む

勤勉

１．勤勉は通語の勉強のことにて、誰も知りたる事なれども、之を行ふ人は甚だ少なきを見るなり、凡そ勤勉は学問するにも、官途に在るも、職業を為すにも、何れも必要のことにて、若し勤勉の字を忘るゝときは何事も成就すること能はざるなり。

２．勤勉を為すに二個の要件あり、
（1）は「立志」にして
（2）は「専一」なり。

３．初めに何を為さんといふ志を立てざるときは、縦令勤勉せんとすも的なき所に矢を放つが如く、其勤勉する目當なかるべし。

４．故に人の此世に在るや、先づ其志を立つるを肝要とす。

５．或は学士とならんとか、或は工人とならんとか、或は農人とならんとか、或は商人とならんとか、己が見込を確と立てざるべからず。

６．尤も世間には官員とならんと志す人もあれども、官員は其成ると成らざるとは他人の心に在る者なれば、此の如きことを頼みて目當を定めんとするときは、大に狼狽することあるべし。

７．故に志を立つるには、必ず己が一身の力を以て為し得べきことのみを以て之を定むべし。

８．既に其志の定まりたる上は、学士なり農工商なり、夫々の事業に就きて飽くまでも勉強すべし。

９．是を「立志」といふ。

10.「専一」とは心を一方に向けて外に散乱せざることなり。

11. 心を散乱することは、例へば学問を為しながら商業を心掛くるとか、商業を為しながら他の遊芸を心掛くるとかいふは、皆心の散乱せるなり。

12. 今仮に人心を以て千斤の力ありと仮定するとき、心を一業に専用するときは千斤の力は皆其業の上に注ぐなり。

13. 然るを之を他の業に分つときは、基本業を為すの力或は七百斤となり或は五百斤となり、甚だしきは他に散乱するの量甚だ多くして、其本業に向ふの力は三百斤に過ぎざることあり。

14. 然るときは、何ほど英才の者にても其業を仕遂ぐること能はざるべし。

15. 故に「立志」と「専一」との二者は、勤勉の為の二大要法なり。

16. 今世間の人、大抵は勤勉の善なることを知れども、之を行ふ者の少なきは、之を妨ぐる者あるに由る。

17. 勤勉の妨を為す者に其大なる者五あり。
（１）に酒、
（２）に色、
（３）に懦弱、
（４）に厭倦、
（５）に人言是なり。

18. 此五者を去らざるときは、立志専一の二良法を行ふも、亦全く勤勉の功を奏すること能はざるなり。

P90 ～ 91

― 2017 年 5 月 22 日（月）林明夫―